

安部公房『砂の女』の素材と方法

佐々木幸喜

はじめに

安部公房『砂の女』は、「純文学書下ろし特別作品」として一九六二年六月に新潮社から刊行された。短編「チチンデラヤバナ」『文學界』一九六〇年九月を元にした作品である。本作は、発表の翌六三年には第一四回読売文学賞（日本）、六七年には最優秀外国文学賞（フランス）をそれぞれ受賞した作品としても知られる。論集として、『安部公房『砂の女』作品論集』（石崎等「編」、二〇〇三年六月、クレス出版）が編まれているのをはじめ、研究の蓄積も多い。

本作には、主な登場人物として、昆虫採集のために砂丘を訪れた男「仁木順平」と、彼と生活を共にする「女」が出てくる。「女」の家は「部落の一番外側にある、砂丘の稜線に接した穴のなか」（第一章）にあり、「仁木順平」はそこで一泊するつもりでいたが、「女」の家から出られずにいる。一週間経ったところで、「仁木順平」は、職場の上司である「教頭」が「捜索願の書式を問いあわせに、警察を訪れる」（第二章）ところを想像する。そのとき、「仁木順平」の背格好、顔のつくり、目鼻立ちなどが示される。

姓名、仁木順平。三十一歳。一メートル五十八、五十四キロ。髪はやや薄く、オールバック、油は使用せず。視力は右〇・八、左一・〇。肌はやや浅黒く、面長。眼と眼がよっていて、鼻は低い。角張った顎と、左耳の下のほくろが目立つ以外、ほかにこれといった特徴なし。血液型はAB。舌がもつれたような、まどろっこしい話しぶり。内向的で、頑固だが、人づきあいはとくに悪いというほうではない。服装はたぶん、昆虫採集用の仕事着。上に貼付した正面写真（二カ月前に撮影のもの）。（第二章）

ここで注目したいのは、顔の細かな描写とともに、「内向的」や「頑固」といった性格が記される点である。「仁木順平」について、先行研究では、「平凡で、受身の教師」⁽¹⁾、「ごくふつうの平凡な男」⁽²⁾、「ありふれた人間」⁽³⁾といったように、平凡でありふれた男であると読まれてきた。また、『砂の女』を安部文学の代表として読む論の中でも、作中人物が「名前もなく、個人の生活史もほとんどなく、ほぼ抽象」⁽⁴⁾的だとする指摘もある。

本稿では、この「搜索願」の情報に、「仁木順平」の性格が書き加えられているところに注目したい。外見だけでなく、性格がここで示される意味は何か。例えば、作品末尾で「仁木順平」が穴に留まることを選んだ理由・背景として、先行研究では様々な主張が見られるが、顔の描写が「仁木順平」の行動の理由を説明する鍵になりうるのではないか。本稿で確認したいことは以下のとおり。

安部の小説では、顔や名前が描かれず、いわば、代替可能な人物が設定されることがしばしばある。多くの先行論において、『砂の女』の「仁木順平」もまた、「平凡な男」であるとして論じられてきた。しかし、「仁木順平」は顔が細かく描写される点で、他の安部文学の登場人物とは異なるといえる。なぜ「仁木順平」は顔が描写されるに至ったのか。さらに、顔の描写と性格にはどのような関係が想定されていると考えられるか。

本稿の構成は以下のとおりである。

「一」では、『砂の女』の梗概および先行論を確認する。これにより、『砂の女』の成立に関わった素材（材源）として判明しているものが何かを整理する。「二」では、安部が一九五〇年代から六〇年代初頭にかけて残した著作を確認する。これにより、安部が何に関心を寄せていたかを見る。また、新たに『砂の女』の材源と考えられるものを指摘する。「三」では『砂の女』と材源との比較を行い、「四」では日本語表現に着目することで、『砂の女』の構造説明を目指す。

一、『砂の女』のあらすじと先行論の概観

『砂の女』はアラビア数字で節が三に分けられ、それが三章に割り振られる¹⁾。そのあらすじは、以下のとおりである。灰色で網かけしたのは、『砂の女』の着想源として、先行論により明らかにされている個所である。

八月、男が昆虫採集のために砂丘を訪れる。夜が近づいてきたため、男は村人に、泊まる場所を都合してもらい、穴の中にある一軒家に向かう。そこでは女が一人で生活していた。女の家は、砂掻きをしなければ砂に埋もれてしまうような家であった。翌日、男は穴の中に閉じ込められたことに気づく（第一章）。男は、穴からの脱走を試みる。男の試みは、成功したように見えたが失敗。村の人々によって、再び家に連れ戻される（第二章）。一〇月、男は女との生活を再開させる。翌三月、女の妊娠が判明するが、五月、下半身からの出血がある。子宮外妊娠の可能性があり、女は穴から運び出され、病院に連れて行かれる。家には縄梯子が残される。男は外に出ることもできるが、穴の中に留まることを選ぶ（第三章）。

網かけの一つ目、作品の舞台が砂丘ということについて。これには、二つの読書経験、一つの実地取材が関わっている。読書経験の一つは、リッチ・コールドー『沙漠と闘う人々』（甲斐静馬訳、一九五二年九月、岩波書店）である。安部の随筆「常識について」（『文庫』、一九五三年一月）に、「せんだって、リッチ・コールドーの『沙漠と闘う人々』を読み、深い感銘をうけ

た」と示される。安部は『沙漠と闘う人々』について、この引用で示した後もいくつかの媒体で言及しており、関心を寄せていたことがわかる。中野和典（二〇〇二）は、安部のそうした発言の一つ、「消えたブルジョア」（『現代詩』、一九六二年一月）にこの書名が確認できることを指摘した上で、当該書二六四頁にある「組立式」露塚の記述が、『砂の女』第三章に見られる「溜水装置」の「発想のもとになっている」^⑤とする。安部がこの『沙漠と闘う人々』を読み、小説に取り入れるきっかけとなったのが、実地取材の経験である。その様子が窺えるのが、前掲「消えたブルジョア」での発言である。（夜の会）や（現在の会）などで活動をもにした関根弘との対談記録を文字化したものであり、『砂の女』には「モデル地区」のようなものがあるのか、という関根の質問を受け、安部は次のように発言している。

モデル地区といえるところあるんだよ。酒田の辺なんだ。山形県だね。〔略〕酒田あたりは、もちろんあれはフィクションだけでも、実際すごいんだよ。かささして飯食つてるといふ、本当なんだよ。部落のやつはみんな眼がまつ赤になって、というのは砂でしよつちゅう眼をやられてるんだよ。飯食う時かさささいといけないんだ。どんどん砂が入ってきて。／〔略〕／砂漠ということ、おれ満州で育つたでしょう。〔略〕そういうところを日ごろ見てたというのが、砂の生きた形があつたんじゃないかね。それから前に岩波新書の「沙漠と闘う人々」を読んで、砂漠というものがかなり人為的なものだということね、ああい

うものがずっと潜在してて、それが酒田で引き出されたというふうに思うね。

これらは『砂の女』のどういった描写に生かされたのか。傍線一つ目は、「村の漁師らしい老人」の「充血した眼」（3・1）という描写や、「女」の「目つきをべつにすれば、なかなか愛嬌のある顔だと思ふ。しかしその目つきも、おそらく眼病のせいだろう。赤くただれた眼のふちだけは、いくら化粧してもかくせない」（4・1）という描写に反映されていると考えられ、また、傍線二つ目は、砂の家での暮らしを示す「魚の煮つけに、貝の吸物だった。いかにも浜の食事らしく、それはいいのだが、食べはじめた彼の上に、女が番傘をひらいて、さしかけて来たのである」（4・1）などの描写に反映されていると考えられる。安部が『砂の女』を発表したのは前述のとおり、一九六二年のことである。随筆「常識について」が一九五三年発表であることを踏まえると、安部は、『砂の女』を発表する少なくとも九年前の時点で、『沙漠と闘う人々』を読んでいた。読書に至るときに、幼少期を旧満州、すなわち、亜寒帯から乾燥帯に区分される中国東北部で過ごし、砂漠が身近であったことも関わっていたであろう。さらに、酒田近辺での取材を通じて、集落の人々の暮らしや外見を知ることになる。安部が「酒田の辺」にこうした集落があることを知ったのは、「ある週刊誌のグラビア写真」による。次に示す安部の随筆^⑥に、「週刊誌のグラビア写真」に触発されて向かった「砂に埋れた村」で見聞きした話が『砂の女』の着想源になったことが語られる。

最初に、その風景を知ったのは、ある週刊誌のグラビア写真からだった。酒田市の近くにあるという、その砂に埋れた村の姿は、奇妙にぼくをひきつけた。たまたま東北旅行の機会があり、ついでにそこを訪ねてみることにした。砂が木材を腐蝕する話と、食事のときに傘をささなければならぬという話を聞いただけでも、来たかいがあったと思つた。／＼「略」／酒田の風景は、ぼくの内部に眠っていたさまざまな砂を、再び現実によりみがえらせ、それに流れと方向をあたえる、いいきっかけになってくれたようだ。それから四、五年たつて、『砂の女』がうまれた。

安部の関心を引いた、この、「ある週刊誌のグラビア写真」が第二の読書経験である。これは、近藤一弥の指摘⁽¹⁾にあるよう、『週刊読売』（一九六〇年五月二九日号）掲載の「砂」と題された五葉の写真だと考えられる。一葉目には撮影場所が「山形県酒田市浜中部落」であると書かれている。三葉目の写真からは、屋根に小石がいくつも置かれているのがわかる。安部も実際に見たと考えられ、それが次のような描写につながっているといえよう。

とつぜん視界がひらけて、小さな部落があらわれた。高い火の見櫓を中心に、小石でおさえた板ぶきの屋根がむらがつた、貧しいありふれた村落である。むろん、その中の何軒かは、黒い瓦ぶきだったり、べにがら色のトタンぶきだったりした。トタンぶきの建物は、部落の中の唯一の四つ辻の角にあつて、どうやら漁業組合の集会所らしかった。

これがあらずじの灰色の網かけ一つ目はもちろん、二つ目「穴の中にある一軒家」、三つ目「砂掻きをしなければ砂に埋もれてしまうような家」に関わっていると考えられる。なお、前掲のあらずじに網かけはしていないが、「女」が「子宮外妊娠」(31・32)したことについては、木村陽子(二〇〇九)⁽²⁾が同時代状況を踏まえていると指摘している。木村論文は、三谷靖『婦人の淋疾』(一九四八年二月、鳳鳴堂書店)の刊行があつたこと、「仁木順平」が「淋病」を「以前わずらつた」(19・22)でいたことを指摘した上で、「尿中淋糸が慢性淋疾の典型症状であること、淋病と子宮外妊娠の相関性などは、小説発表当時一定の認知が得られていたと考えられ」とする。「淋疾」や「子宮外妊娠」については、安部の発言こそ確認できないものの、木村の報告は、安部がどういった時代に生きたかを知るうえで重要である。

さて、本稿冒頭で示したとおり、『砂の女』は、「チチンデラヤパナ」を元にした作品である。これについては、田中裕之(一九八六)⁽³⁾や廣瀬晋也(一九八七)⁽⁴⁾にも既に指摘がある。「チチンデラヤパナ」は、「昆虫採集」のために「砂丘」を訪れた「男」が「砂丘に接した家」に泊まった翌朝、前日使つた「梯子」が外されていることに気づいたところまでを描くが、これは『砂の女』第一章の一節から七節半ばまでと重なる⁽¹⁴⁾。「チチンデラヤパナ」と『砂の女』の大きな違いの一つ、それは「はじめに」で示したとおり、作中人物に名前がつき、顔形が明らかになることである。

安部文学を特徴づけるものの一つに、作中人物の無名性が挙げられる。先行論がそこに着目してきた背景には、例えば、安部自身の随筆「藤野君のこと」(『波』、一九七五年五月)の記述にあるように、作中人物に特定の名前がついていないことが関わっているといえる。安部はこの随筆の中で次のように述べる。

もともとぼくの作品の登場人物に、名前がつけられていること自体、きわめて例外的である。たいていの場合、代名詞だけで済ませてしまっている。たまに名前を名乗って登場してくる人物があっても、深い意味はなく、やむをえずつけた符牒でいどのものに過ぎない。出来れば名無しのままで済ませたいと思う。それで不都合を感じた事はめったにない。たとえば、『砂の女』の仁木順平にしても、失踪後、手続上の必要からはじめて明らかにされた氏名であって、主人公として活躍中は、単なる男にしかすぎなかったのだ。登場人物の無名性は、多くの作品にとって、どうやら不可欠の条件らしいのである。

確かに、安部の作品には、「ぼく」(『バベルの塔の狸』、『人間』、一九五一年五月)などや「おれ」(『飢えた皮膚』、『文學界』、一九五一年一〇月)などといった一人称代名詞、あるいは、「K君」(『空中楼閣』、『別冊文藝春秋』、一九五一年一〇月)など、「K子」(『水中都市』、『文學界』、一九五二年六月)といったアルファベット一字で示される名前が見られる。

一方で、次のような発言が確認できる点にも留意しておきた

い。インタビュー「『砂の女』と小説作法」(『葉局新聞』、一九六五年五月二五日、聞き手は樋田喜保)からの引用である。

実際にどんな動機で書いたかわかるような作品はインチキじゃないかな。自分で理解できないところまでつきつめていつてから出来たものが本当だと思うな。こんな話、小説になるといつていきなり書いた時は大抵失敗です。

右の引用から、安部は、小説の着想の「動機」が読者にわからないことを望んでいると思われるが、一九五〇年代中盤から『砂の女』(一九六二)に至る作品群の中には、名前が示される作中人物がおり、そこには何か意識が働いたのではないか。それらの作品に共通するのは、顔や背格好が細部にわたって描写されることである。その一つ、「使者」を見てみよう。

二、安部文学と「心理形態学」

「使者」は、一九五八年一〇月、『別冊文藝春秋』に発表十五された。本作は、「奈良順平」と「一人の男」のやりとりを軸に進む。「奈良順平」は「文明批評家」であり、彼が講演会での出番を待っているときに、その男が控室に入ってくる。男は自身が「はるか昔に、他の天体から移住して来て、住みついた種属」の「火星入」であり、その使命は自身が「火星入であることを認めてくれる、代表的な地球人をさがしだすこと」であると語る。「奈良順平」は男を次のように形容する。次の引用は、男が「奈良順平」の控室に入ろうとしたのを「奈良順平」

が制した場面である。

えらいことになったぞ、こいつは思ったよりも悪質らしい、
「略」そう言えば顔色も悪いし、目つきも悪い。やたらと
首が長くて、なで肩で、そのくせぎくしやく骨組ばかりが
目立っている。クレッチメルの分類から言っても、まさに
シツオイド型の典型だ。こうと知っていれば、はじめから
相手になんかしなかったのに……

「奈良順平」は、「男」の様子を訝しみ、「そう言えば」と続
けたところで「クレッチメルの分類」をもとに「男」の容貌か
ら性格の傾向を見出そうとしている。ここで「クレッチメル」
とあるのは、ドイツの精神科医 Kretschmer, Ernst (一八八八—
一九六四) のことだと考えられる⁽¹⁴⁾。彼の名前が確認できる
書物に、『容貌と性格』(原題 *Physionomie et caractère*) がある。
フランスのフランシス・ボオ (Baud, Francis) が一九四七年に
発表したもので、日本では一九五五年九月、白水社から刊行さ
れている。訳者・山崎清による「訳者まえがき」は、次のよう
に始まる。

人間の顔が「形態学」と「心理学」との両面から、同時に、
また総合的に研究されたならば——とは、誰しも考えるところ
であるが、実際問題としてはひどくむずかしい仕事なので、
この課題に対して科学的に手をつけてみようとするもの
はなかった。／今世紀(二〇世紀を指す)にはいつて
からは「心身相関」の研究が勃興して、肉体と精神との関

連の研究は、イタリアの生理学者ニコラ・ペンデのいう「人
間生物類型学」(*Biotypologia humana*) として発展して
新しい学問分野が開拓され、クレッチマー(独一九三七)、
ペンデ(伊一九三七)、シェルドン(米一九四二)、ヴェル
ダン(仏一九五一)などの業績が相継いで発表された。そ
の後の研究も急速にひろがっているが、顔の課題にふれて
いるものはわずかに独仏の系統のものだけである。／この
類型学の発展過程と同時併行的に、レイ・コルマンの、い
わゆる「心理形態学」(*Morphopsychologie*) の研究が進め
られていた。精神科の医学者コルマンの初期の研究は主と
して「略」人間の顔の個々についての形態学的、心理学的
な分析を企てようとするものである。わが国では、このコ
ルマンの業績についての紹介は未だ行われていない。／こ
のボオの『容貌と性格』は、いわばコルマンの解説書と考
えてよいものであつて、形態学、生理学、心理学の三つの
観点からする総合的な「人間の顔」の観察の仕方を要約し
ているのであるが、それぞれ独立した三つの学問体系を組
み合せてみようとする試みはけつしてやさしい仕事ではな
い。

傍線一つ目に「クレッチマー」の名が見える。「クレッチマ
ー」は Kretschmer を英語の発音 [kreʃmə:]⁽¹⁵⁾ で読んだものと
推測される。当該書「第一章」では、彼の提唱した「シクロチ
ーム(躁ウツ性気質)とシゾンチーム(分裂性気質)」⁽¹⁶⁾ が紹介
され、「分裂性気質」の一つとして「虚弱型(或は痩せ型)」は、
すべて細く長く繊細で、胸部が窄い」と記される。「使者」の

「男」の容姿はこれをなぞっているといえよう。

翻つて右の引用のとおり、訳者・山崎清は当該書を、ルイ・コルマン (Corman, Louis) の提唱する「心理形態学」、すなわち、「人間の顔の個々についての形態学的、心理学的な分析」を指す研究の「解説書」と位置づける。実は、この「ルイ・コルマン」について、安部が言及しているものがある。それが、次の随筆、「文体論雑感」『思想』一九五五年一月）である。随筆は、一七の項目に分かれており、そのうちの四つで「人相」あるいは「顔」についての記述が見られる。最初の引用「5」には、「ルイ・コルマン」が「人相についての真の科学者」であり、それを「フランシス・ボオ「容貌と性格」」により知ったこと、「6」には、「人相学」に関する言及、「9」には「心理形態学」と書かれていることが確認できる。次の引用はそれらの一つ、「10」である。「ルイ・コルマン」の指摘したこととして、「感覚前庭圏」のことが記されている。確認してみよう。

ルイ・コルマンは、顔の中の目、鼻、口を一括する内側の圏を定め、これを感覚前庭圏と名づけた。人相はこの前庭圏の面ならびに量の拡大傾向と縮小傾向の組合せとして考えられる。すべての顔がこの二つの相反する傾向の緊張の中にあるのだ。この緊張の様相は、環境との関係で定まるから、自然その時代の社会的背景によつて緊張に一つの方向がうまれてくる。ある種の緊張の傾向に、時代的共感が発生する。美人の定義が時代とともに変化するのは、こうした科学的根拠にもとづいているのである。

これに対応する記述が、『容貌と性格』第二章「形態の諸要素」に確認できる。

われわれは、顔を、二つの同心円によつて二つの圏に分ける。／外周の輪カク(マコ)による圏（外周圏）——前にはこれを単純に、「枠」と呼んだ——を本文中では「全体の枠」と呼ぶこととする。／一方、目、鼻、口を一括する内側の圏を定め、感覚前庭圏とする。／この内側圏を次の二つに区別する。すなわち、／1 前庭枠——眉隆起、鼻骨と鼻軟骨、上下歯列をふくむ。／2 狭義の前庭——眼裂、鼻孔、口裂。

「われわれ」とあるのは、『容貌と性格』の著者フランシス・ボオも含んでいるが、安部の引用を見る限り、これがルイ・コルマン一人の主張と見なしていた可能性もある。しかし、傍線を引いた箇所については「文体論雑感」で安部が引用した記述と一致しており、少なくとも、安部が実際に『容貌と性格』を読んでいたと断定できるだろう。

三、『砂の女』と『容貌と性格』

ここで、『砂の女』に立ち返ってみよう。「仁木順平」の外見は、「髪はやや薄く、オールバック」、「面長」であり、「眼と眼がよつていて、鼻は低」く、「角張った顎」（11・2）をしていると形容されていた。

「面長」とは顔の輪郭を指しており、『容貌と性格』という

「全体の枠」(二〇頁)で判断される。「髪はやや薄く、オールバック」や「眼」の描写は、『容貌と性格』でいう「額と側頭部」を指す「上層」(二六頁)に、「鼻」の描写は、『容貌と性格』でいう「中層」(二五頁)に、「顎」の描写は、『容貌と性格』でいう「頬部の下部と下顎骨と頤部」を指す「下層」(二五頁)に区分される。

まず、「全体の枠」については「拡大と縮小の検定。全体枠の幅と高さをくらべ、幅がひろいか窄いかの区別」(二六頁)が行われる。「全体の枠」の「形態学的な」傾向としてフランス・ボオが示すのは、次のとおりである。『容貌と性格』六八頁の記述である。

顔の輪郭の拡大(顔の全体からみて幅ひろい)のあるものは、力や、力における連続性、努力に対する忍耐などの標識である。このような対象においては生理的、心理的欲求が強く、自分で実現しうる利得を忘れることがない。／「略」／拡大はまた、輪郭の幅とは別個に、肉づきの丸味によって示され、一般に、柔軟性の標識となり、温和で従順、外交的、社会的、日和見的な性格であることを示す。

「仁木順平」は「面長」であり、『容貌と性格』でいう「縮小」に該当すると考えられ、右の引用とは対照的な容姿をしており、ここで示されるものとは反対の性格を有するといえる。すなわち、「内向的で、頑固」(一一・一二)という性格につながる。

次に、各層について見てみよう。まず、「下層」について。「下層は、特に本能(各種の生理的要求、性欲)の支配する活動性

を示す」(七三頁)と説明される。「仁木順平」は「角張った顎」をしており、幅は広いといえる。『容貌と性格』七五頁には次のようにある。

下層の幅のひろいもの(略)は、健康、疲労に対する抵抗、食欲、自己顕示欲、また、強い肉感性を示す。

次に、「中層」について。「中層は、活動性よりはむしろ感情の層であつて、環境から受ける印象によって支配される活動性を示す。すなわち、反応性の層である」(七三頁)と説明される。「仁木順平」の「鼻は低」く、『容貌と性格』のいう「鼻の前面牽縮」(八〇頁)に該当するといえる。『容貌と性格』八〇頁の記述を参照してみよう。

感情の旺盛と統制の間に葛藤のある不安定な感情性であつて、内面的な苦悩があり、このことから苦痛、悲歎、罪科の反芻が起る。このような対象は、何ごととも忘れることなく、また、決して他人を宥すこともない。

さらに、「全体の枠と前庭の縮小」(八〇頁)が合わさったときの傾向についても記される。

全体の枠と前庭の縮小は生命表示の冷たさの標識であり、「心の乾燥」(sécheresse de coeur)であつて、他人に対する飛躍や表出の烈しさの減退を示す。

最後に、「上層」について。「上層」は、最も多くの興奮(刺激)を提供する社会生活の過程において発達する。この層は、知性の層である(七三頁)と説明される。「仁木順平」の「髪はやや薄く、オールバック」である。ここから「仁木順平」の額が毛髪で隠されていないことがわかる。これに関して、『容貌と性格』八二頁には次のようにある。

幅がひろくて高い、大きな額で、陥凹^{マヤ}も突出もないものは、一般的にいつて、探求性の欠除による散発的な知能の標識であり、デレタテンティズムを意味する。

また、「眼と眼がよっている」に関して、『容貌と性格』には、対照的な記述がある。八三頁の記述である。

左右の眼が離開し、顔の皮膚面にすれすれの位置にあるものは、多くの物象についての幅ひろい知能力を伴うことが多いが、すべてに深さを欠く。このような左右両眼の離開がさらに強調されると、知能活動は分散的となり、精神の動揺がはげしく、一つの目標に集中するのが困難であつて、時間のかかる重要な仕事を実現することはむずかしい。

『容貌と性格』にある「全体の枠」、「下層」、「中層」および「上層」の記述をふまえ、「仁木順平」に付された性格を列挙すると次のようになるだろう。まず、「面長」という特徴からは、「努力に対する忍耐」や「柔軟性」に欠ける人物であること、また、内向的な性格が導かれる。「角張った顎」という特

徴からは、「貪欲、自己顕示欲、また、強い肉感性」を有した人物であることが導かれる。低い「鼻」という特徴からは、「不安定な感情」を持ち合わせることで、また「決して他人を宥すこともない」人物であること、「他人に対する飛躍や表出」の乏しさが導かれる。さらに、「髪はやや薄く、オールバック」という特徴からは、「散発的な知能」の持ち主であることが導かれる。最後に、「眼と眼がよっている」という特徴からは、「知能力」には偏りがある一方で、その知識は「深さ」を持つ。「知能活動」は集中的なものであり、「精神の動揺」は少なく、「一つの目標に集中する」ことを好むと導かれる。これらの性格のいくつかを作品に沿って確認しておこう。

「仁木順平」が「汽車で半日ばかりの海岸に出掛けた」(1・一)のは、「砂地にすむ昆虫の採集」(2・一)をするためであった。実際、「仁木順平」は昆虫に関する多くの知識を備えた人物として描かれる。その例が、昆虫の和名を挙げながら「女」との会話を成立させようとする場面(4・一)、「知っているかぎりの昆虫の名前」を「科と、目に分けて」挙げていくこととする場面(13・二)などである。その彼の目標こそ、「新種」を「発見」し、「自分の名前」を「半永久的に保存」(2・一)することであった。彼が探し求める「ハンミョウ」に関する言及は、作中二回に上る。この目標は作中では達成しなかったものの、『容貌と性格』でいう「一つの目標に集中する」人物として設定されていると考えられる。また、「仁木順平」は「砂」に、「現実のうつつうしさ」(2・一)との違いを見出す。ここには、「仁木順平」の「忍耐」の低さが現れているといえる。さらに、「仁木順平」には「あいづ」と呼ぶ、「二年と

四カ月」(14・二)にわたり肉體關係にある人物がいる。「女」
とも肉體關係を持つようになってからも、「あいつ」を思い出し
(19・二、20・同、27・同、31・三)でおり、性的対象とし
て捉え続けていることがわかる。ここに、『容貌と性格』でい
う「強い肉感性」を見ることが出来る(二七)。

ここまで、『容貌と性格』を対照しながら、「仁木順平」の性
格を確認してきた。ここには、「仁木順平」ならではの性格が
現れているといえよう。「搜索願」という形を取っているが、
実際には、「仁木順平」の性格が、『容貌と性格』の記述をなぞ
っていることを示している(三二)。
最終節では、計量的分析を
もとに、『砂の女』に見られる表現形式について考えてみたい。

四、『砂の女』で用いられる日本語表現「という」

稿者は、前稿「安部公房「大きな砂ふるい」とストリンドベ
リ」の結びにおいて、次のようなことを述べた。

安部がどのような表現形式を用いているかを明らかにした
い。そのためには、作中の語彙や表現を計量的に見ていくこと
が有用だと考えられる。そこから、安部文学の文体の変遷を探
る見通しが立つのではないか、ということである。

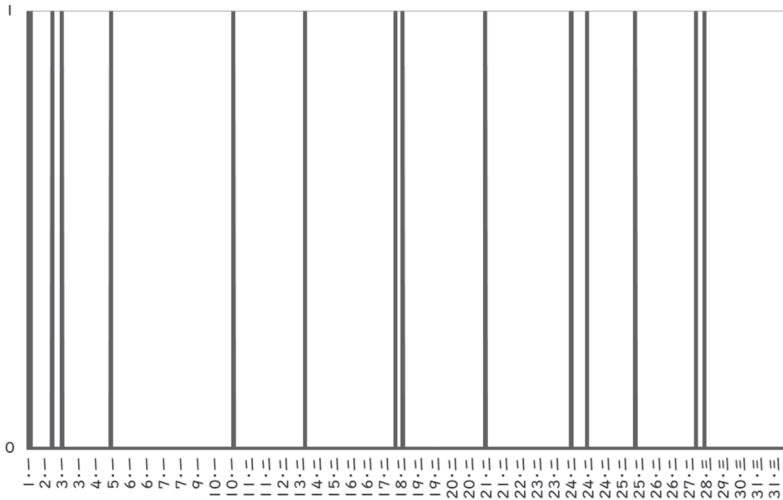
本稿ではその検討の一環として、『砂の女』について確認し
てみたい。データの作成手順は、村上征勝「監修」『文化情報
学事典』(二〇一九年二月、勉強出版)の「文学・文献の計
量分析」(二七)に倣った。形態素解析器は MeCab を用いた。得
られた『砂の女』のデータサイズは、異なり語数六五九五、延
べ語数二八七九一である。本稿では『砂の女』に見られる表現

形式の中で、「という」に着目した。

「という」は、認識のモダリティの形式の一つである。日本
語記述文法研究会(二〇〇三)によると、認識のモダリティは、
「事態に対する話し手の認識的なとらえ方を表すもの」であり、
「という」はその類型の一つ、「何らかの証拠に基づく認識を
表す形式」に分類される。「という」は「伝聞的な意味を表す
表現」であり、「書きことばで用いられることが多く」、「おも
に、言い伝えや歴史的事実を述べるときや、報道的な文体の文
章」で用いられるとされる(二五)。
また、日本語文法学会(二
〇一四)では、「という」は、ある「情報源」から「得た言語
情報」を「知識として表明する」ときに用いられるとされ
る(二四)。

先のデータを用い集計(二五)したところ、作中において「と
いう」は一八例確認された(二六)。
『砂の女』は小説であり、「報
道的な文体の文章」(日本語記述文法研究会「二〇〇三」とは
見なしにくい。にもかかわらず、一八例、用例が見られるのは
興味深い。比較対象として、『石の眼』(一九六〇年六月、新潮
社)では、「という」は三例あるが、知識表明として使われて
いるものは一例のみである。『石の眼』は、『砂の女』刊行の二
年前に安部が発表した長編小説である。両作とも語り手は、作
中人物として登場せず、かつ、他人(特に焦点人物)の思考を
語る点で共通する。データサイズも同程度である。次のグラフ
に『砂の女』における「という」の分布を示した。黒の直線は、
そこに「という」が出現する文が分布していることを意味する。
各章に比較的満遍なく分布しているといえる。あわせて、その
用例をいくつか引用し、示す。

『砂の女』における「という」の分布



統計のうえでも、年間数百件からの失踪届が出されているという。
(1・1)

漂流者が、飢えや渇きで倒れるのは、生理的な欠乏そのもののよりも、むしろ欠乏にたいする恐怖のせいだという。

(18・11)

『砂の女』は、「仁木順平」に寄り添う語り手の視点により、進行する。語り手は、「仁木順平」の思考に寄り添って物語内容を語っており、「という」を用いるときも「仁木順平」に寄り添っていると考えられるが、これは、「仁木順平」の性格(例えば、「知識」の深さ)の造形にも貢献しているといえるのではないか。

おわりに

本稿で検討してきたことを整理したい。大きく四点に分ける。
一点目。『砂の女』の梗概および先行論の概観から、読書経験ならびに実地取材の結実したものとして、『砂の女』があったことがわかった。最初期の着想源と考えられる『沙漠と闘う人々』に触れたのが一九五三年、『砂の女』のもととなった「チンデラヤバナ」を発表したのがその七年後の六〇年であることを考えると、安部は、材源に触れてから作品に取り入れるまでに十分な時間を費やしたように思われる(二七七)。

二点目。一九五〇年代から六〇年代初頭にかけての安部がどのような著作を残しているか、それを確認することで、安部が

「心理形態学」に関心を寄せていたことがわかった。元々安部は、精神科医を目指しており、そのことが関わっていると思われる。「心理形態学」への接近により、安部は「顔」と「性格」に関係性を見出そうとしたといえる。

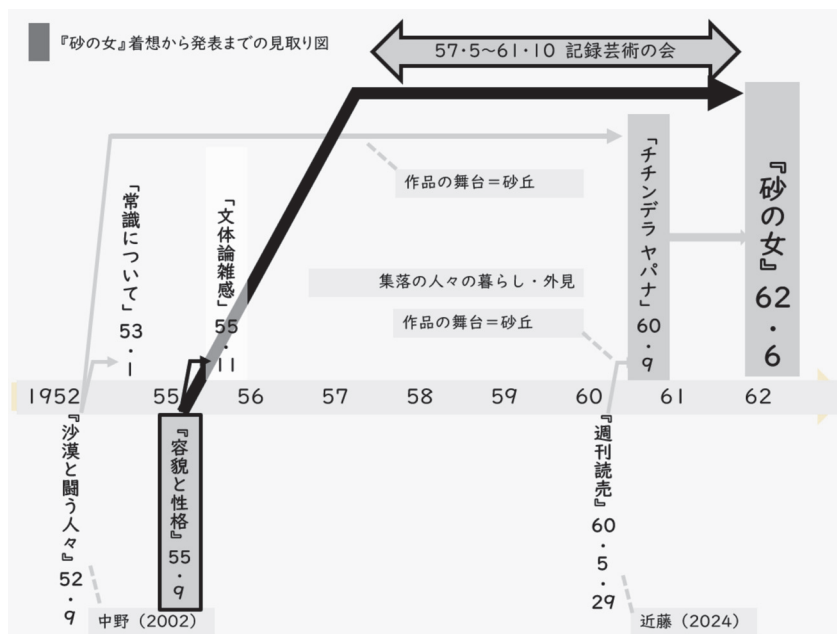
三点目。『砂の女』と材源との比較から、『砂の女』の主要な作中人物「仁木順平」の造形に『容貌と性格』が関わっていることがわかった。「仁木順平」は、先行論で指摘されてきたような平凡でありふれた人物ではなく、『容貌と性格』から組み立てられた人物であり、彼独自の性格が付与されていた。作品末尾で「仁木順平」が穴に留まることを選んだ理由も、容貌に起因すると考えられる。すなわち彼は、『容貌と性格』の記述をなぞる人物であり、「他人に対する飛躍や表出」が乏しく、「一つの目標に集中する」人物として描かれるのである。「仁木順平」は、溜水装置に一つの目標^(三十一)を見出した。「仁木順平」の性格は作中において変化することなく、『容貌と性格』によって規定されたとおりに行動していたと考えられるのである。

四点目。作中、どのような表現形式が見られるか、計量分析の手法をとり、その分布を検討した。本稿では、「という」が全体を通して用いられていることを指摘した。「という」は、ある情報源から得た言語情報を知識として表明するために用いられる表現形式である。「という」の使用は描写の正当性を高める効果を狙ったか。それと同時に、「仁木順平」の人物造形（例えば、「知識」の深さ）の補強にもつながっていると考えられる。また併せて、〈記録芸術の会〉（一九五七―六一）での活動が影響している可能性がある。『砂の女』が〈記録芸術の会〉解散後に発表されたことについては、森山直人（二〇一

三）^(三十二)にも指摘があるが、どういう関係があったかについてはこれまで言及されてこなかった。しかし、〈記録芸術の会〉での活動を経て、一九五〇年代以降の安部が着目した表現の一つに、伝聞の「という」があったといえるのではないだろうか。

本稿で指摘したことも含め、『砂の女』着想から作品発表までの見取り図を次のように整理したい。図の中央にある数字は西暦を示し、それより上にあるのが、安部の著作または彼が関わった活動、下にあるのが、『砂の女』の材源である。

安部が『砂の女』の後に発表する作品に「他人の顔」(『群像』一九六四年一月、後に改稿、一九六四年九月、講談社)がある。その第一部《灰色のノート》にも「心理形態学」に関する作中人物の発言が見られる。作中人物の言葉を借り、容貌と性格に関係を見出そうとした安部の姿がここにも現れている。『燃えつきた地図』(一九六七年一〇月、新潮社)とあわせ、「三部作の要素」^(三十三)を持ち、「失踪前駆症状」^(三十四)の時代を生きる人物が描かれたこれら三作にどのような共通点があるか、また、その後に書かれる長編小説『箱男』へのつながりについて検討していきたい。



〔注〕

(二) このきっかけを作ったのが谷田昌平であった。谷田は、新潮社の「純文学書下ろし特別作品」シリーズを企画していた人物である。谷田の述懐によれば、「チチンデラヤパナ」をもとにした「長篇」の執筆を依頼したのが、安部公房への初めての接触である。

「昭和三五年夏の終わりのころ」、「はじめて会う少し前」に「チチンデラ ヤバナ」が発表されたことと記される。谷田昌平「純文学書下ろし特別作品」——純文学の過渡期に発刊「および、同「安部公房——『砂の女』で始まった親密な付き合い」（いずれも『回想戦後の文学』「一九八八年四月、筑摩書房」に所収）参照。

(二) フランス語表記は、Prix du Meilleur Livre Étranger²
<https://www.babelio.com/prix/47/Meilleur-Livre> (二〇二四年七月一
 五日閲覧)。

(三) 磯貝英夫 「砂の女」 『国文学 解釈と教材の研究』、一九七二年九月。

(四) ウィリアム・カリー「砂——存在の根の探求 安部公房『砂の女』『疎外の構図——安部公房・ベケット・カフカの小説』(安部雄雄訳、一九七五年六月、新潮社)。

(五) 木村功「砂の女」論——(仁木順平)から(男)へ——『宇部短期大学学術報告』、一九九七年七月。

(六) ミコワイ・メラノヴィツチ「砂の女」を再読して『すばる』
一九九三年六月。

(七) 1～10節は第一章に、11～27節は第二章に、28～31節は第三章にそれぞれ割り振られる。節番号が連番となっており、便宜のため、以下、本文引用の際は、先に節番号を示し、中点の後に章番号

号を記すこととする。(例:「第一章3」は「3・1」と表記)

- (八) 中野和典『流動と反復——安部公房『砂の女』の時間——』『近代文学論集』二〇〇二年一月。

- (九) 安部公房「名作取材旅行33」／「砂の女」安部公房／——砂にうもれた村の姿」(『週刊読書人』一九六六年八月二七日号。後、「モチーフの発見」と改題、『安部公房全作品』15「一九七三年七月、新潮社」に所収)。

- (十)『芸術新潮』二〇二四年三月。

- (十一) 木村陽子『砂の女』を読み替える——「死と性病」の再考から』『昭和文学研究』二〇〇九年三月。

- (十二) 田中裕之『砂の女』論——その意味と位置——』『日本文学』一九八六年二月。

- (十三) 廣瀬晋也「メビウスの輪としての失踪——『砂の女』私論——」『近代文学論集』一九八七年一月。

- (十四)「チンデラヤバナ」と『砂の女』の異同については、永野宏志(二〇一三)に詳しい。永野宏志「電子メディア時代における異化——一九六〇年前後の安部公房のテレビ脚本・SFから『砂の女』へ」は、鳥羽耕史「編」『安部公房 メディアの越境者 メディアとパフォーマンズの20世紀②』(二〇一三年二月、森

話社)に所収。

- (十五) 翌五九年七月、テレビドラマ「人間そっくり」(初出は『現代芸術』II、一九五九年三月)として放送。

- (十六)「シツオイド」はアルファベット表記では *Schizoid*。英語での発音は「skitsoid」、ドイツ語読みは「[fiso:it]であり、「使者」の「シツオイド」はドイツ語による発音をカタカナ表記したものに近いといえる。拙稿「安部公房「大きな砂ふるい」とストリンダベリ」

〔京都大学国文学論叢』二〇二四年四月、以下「前稿」で検討したように、安部はドイツ語をよく解しており、ドイツ語で関連文献を読んだ可能性もある。あるいは、三浦岱栄「精神生理学」(一九四九年九月、鳳鳴堂書店)などから摂取したか。三浦は、『Kreischner』の学説は恐らく今日まで企てられた個人精神生理学の分野にあつては、最も見事な成功であつたことについて、誰も疑ふことが出来ない(一九四頁)とする。当該書の中で『Kreischner』はアルファベット表記で統一されている。本書九四頁には、表が示され、「前病的類型」として「チクロイド」、「シツオイド」の二つが確認できる。安部が三浦岱栄の名に触れているものとして、随筆「シュールリアリズム批判」(『みずゑ』、一九四九年八月)がある。また、谷真介「編」『安部公房評伝年譜』(二〇〇二年七月、新泉社)や安部自身の発言(例えば、前掲「砂の女」と小説作法)からも知られるように、元々、大学卒業後は精神科医を目指していたようである。なお、安部と同時期の作家・三島由紀夫の長編小説「青の時代」(『新潮』一九五〇年七月—同年十二月)にも Kreischner の考えが引かれている可能性がある。「あとがき」(『三島由紀夫作品集』2、一九五三年八月、新潮社)に、以下のような記述が確認できる。

当時書いたノオトをみると、こんなことが書き散らしてある。／(一)人間の性格が形づくられる秘密。クレッチメルの分裂性気質の要因。／(冷たく、鋭敏な感情家で、かつ冷酷)／女に対する欲望も、人に負けまいといふ闘争心も、すべては彼の劣等感から生ずる。

- (十七) Kreischner の表記にはゆれがある。例えば、以下のようなものがある。

・クレチマー表記…土井正徳・山根清道・村田安雄『事例調査法』(一九五五年四月、朝倉書店)

・クレチメル表記…暉峻義等『著者代表』『労働科学辞典』(一九四九年一月、河出書房)

・クレチュメル表記…大槻憲二『精神分析学概論』(一九四八年七月、思潮書林)

・クレッチマー表記…阪本一郎・佐藤正・品川二郎『編』『講座教育診断法』第3巻 個性の診断(一九五七年五月、牧書店)
・クレッチメル表記…平凡社『編』『大百科事典』第一三巻(一九三二年二月、平凡社)

外来語の表記のゆれについては、小椋秀樹『現代日本語における外来語表記のゆれ』(相澤正夫『編』『現代日本語の動態研究』[二〇一三年一月、おうふう])の議論を参照した。

(十八) シジチームは Schizotyp。宮城音弥『編』『岩波小辞典心理学』(一九五六年九月、岩波書店)によれば、「分裂病症状をおこす」場合、「これを《分裂病質、シツォイド》(独 Schizoid -oid は類似していることを示す)と呼ぶ」。

(十九) 後に「文体と顔」と改題され、『猛獣の心に計算器の手を』(一九五七年一月、平凡社)に所収。

(二十) 性に関する指摘がある論考として、片野智子「(男らしさ)からの疎外の果てに——安部公房『砂の女』論」『昭和文学研究』二〇二〇年三月)を参照。片野論文は、「女」との性交渉の変化が、「仁木順平」に、同時代の性規範に求められる(男らしさ)の獲得を一旦もたらしたと読む。また、『砂の女』発表前の一六〇年六月に、『性生活の知恵』(謝国権著、池田書店)がベストセラーとなったことを挙げ、高度経済成長期の性規範として、「健

全な性生活」が求められていたこと、男性には「自らの意志によつて身体を統御する男性主体」が要請されていたことを論じる。
(二十一) ルイ・コルマンの提唱した概念も含め、これらの類別が適切かどうかは本稿では措く。

(二十二) 執筆は金明哲。

(二十三) 日本語記述文法研究会『編』『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』二〇〇三年一月、くろしお出版。

(二十四) 日本語文法学会『編』『日本語文法事典』(二〇一四年七月、大修館書店)「伝聞」の項。執筆は仁科明。

(二十五) データは Microsoft Excel で整理した。集計は COUNTIF 関数を用いた上で、目視で確認した。

(二十六) なお、「チチンデラヤバナ」に見られる「という」の用例は四例。なお、次の用例のように、『砂の女』では「という」となっている個所が、「チチンデラヤバナ」では「わけだ」となっているものもある。「わけだ」は説明のモダリティの一つである(日本語記述文法研究会[二〇〇三])。

「チチンデラヤバナ」

子供の場合でも、昆虫採集が特に好きだというのは、多くエディプス・コンプレックスのあらわれであり、その現実を満たすことのできない欲求の代償として、決して逃げだす気づかいのない虫の死骸に、ピンをつきさしたりしてよるこんでいるわけだ。

『砂の女』(1・1)

子供の場合でも、昆虫採集に異常な嗜好をみせるのは、多くエディプス・コンプレックスにとりつかれた子供の場合

であり、満たされない欲求の代償として、決して逃げだす
気づかいのない虫の死骸に、しきりとピンをつきさしたがつ
たりするのだという。

(二十七) ただし、これは「チチンデラ ヤバナ」あるいは『砂の女』
に限ったことではない。例えば、『箱男』（一九七三年三月、新潮
社）の材源の一つに、『動物のことば——動物の社会的行動——』
（ニコ・ティンベルヘン著、渡辺宗孝・日高敏隆・宇野弘之共
訳、一九五七年七月、みすず書房）がある。安部は当該書につい
て、五七年一〇月の時点で既に言及しているが、作品への摂取ま
でに一六年かかっている。その経緯については、拙稿「安部公房
『箱男』試論——ティンベルヘン『動物のことば』との関わりを
めぐって——」（『國語國文』二〇〇九年一〇月）で検討した。

(二十八) 先行論では、穴に留まる理由として執着心が働いたこと、
その執着の対象は「溜水装置」あるいは「女」に向かっていたと
される。前者の読みとして、例えば、田中裕之（前掲注十二）や
木村功（前掲注五）があり、蘆田英治（一九九七）は、溜水装置
に加え女が存在もあつたと指摘する。田中論文、木村論文および、
蘆田英治「安部公房『砂の女』について」（『論樹』一九九七年
一〇月）を参照のこと。本稿での検討により、「仁木順平」はその
顔から既に、物事に執着を持つ人物であると規定されていたと
考えられる。

(二十九) 森山直人「（砂）の闘争、（砂）の記録——あるいは安部公
房における（アメリカ的なもの）について」は、前掲『安部公
房 メディアの越境者 メディアとパフォーマンズの20世紀②』に
所収。

(三十) 「著者との対話」（『名古屋タイムズ』一九六七年一〇月二日）
において、『砂の女』『他人の顔』『燃えつきた地図』の三作を
指して「三部作の要素」があると語る。波瀾剛（一九九七）は、
これら三作を「失踪三部作」と名づけている。波瀾剛「安部公房
『燃えつきた地図』論——作品内の読者、小説の読者、および同
時代の読者をめぐって」（『文学研究論集』一九九七年三月）を
参照。

(三十一) 安部公房「私の文学を語る」（『三田文学』一九六八年三
月）に、「三部作という形で、失踪前駆症状にある現代を書いて
みました」とある。

『付記』

本稿は、日本文学協会第四三回研究発表大会（二〇二四年七月七日、
於北星学園大学）での口頭発表「安部公房『砂の女』の材源と表現
——フランス・ボオ『容貌と性格』、日本語表現「という」に着目
して——」をもとに修正加筆したものである。席上では多くの方々に
貴重なご意見をいただいた。また、本稿をなすにあたり、査読者の方
々に重要なお助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

引用は、特記したものを除いて初出に拠り、漢字は通行の字体を用
いた。（「」内の注記および傍線は佐々木により、改行は「／」で示し
た。また、引用資料中に、現代の判断基準では不適切と考えられる語
句や表現が見られる場合があるが、原文のとおりとした。

（ささき ゆうき・本学国際高等教育院特定准教授）